



馬耳東風

「ホウ、ホウ、ヒイー、ヒイー、ヒロロロロ、ヒロロロロ、クルルル、クルルル、キチ、キチキチキチッ、リーッ、リーッ」

純文学転向にお墨付きの野間文芸賞を受賞し新境地を開いた高村薫「土の記」(新潮社2016)の奈良県大宇陀で聞く身近な山間の声だ。山のコノハズクやトラツグミ、水辺のシュレーゲルアオガエルやアカガエルたち、さらには杉木立のなかのエゾツユムシやクチキコオロギの声を夜を押し包む。山間部の気候や自然、生き物たちの鳴き声や霊の気配まで濃密濃厚に描写される。まさに高村流だ。交通事故で寝たきりの妻を介護しながら棚田を守る農民の心理を老いの孤独生活と絡ませて力量十分に描く。科学用語が密着して裏打ちされ、イネの分蘖ぶんげつと栽培管理をうなずきながら読み進む。お祭りや人足後に酒を酌み交わす山間集落の息づきが伝わってくる。神話時代の神武東征を誇らしく語る長老の居る集落だ。緑したたる田園で旧家を守り認知症を気遣いながら老いてゆく男のラストの数瞬が目を奪う。長塚節「土」(新潮社1945)の再来を思い出す。農民文学の先駆けとして朝日新聞に連載され、百姓生活の獣類に接近した部分を精細に直叙した苦しい読みものだと夏目漱石が序文で述べている。異なる時代を人間の生き様や本性を捉えながら物語が展開し、社会の制度や習俗に振り回され時代に必死に生きる農民の姿に吸い込まれる。教科書にも採用されたが、小作貧農の写実は見事で、涙を滲ませながら読んだものだ。主人公堪次の「毎日必ず唐鋤とうくわを担いで出た。…次の朝彼は未明に鍛冶へ走った」人力に頼る開墾の苦

労が戦後の食糧難時代のそれと比べて、それほど差の無いことを知った。中央公論で発表された農村・漁村・山村問題の共同研究書「貧しさからの解放」(中央公論社1953)の農業経済学の権威近藤康男・東大名誉教授は三世紀を生き、東大農学資料館に功績が展示された。34人の専門家が戦後日本の貧しさを訴えるだけでなく、貧しさを生み出し再生産する経済的メカニズムを明らかにしようとした。意識・観念・宗教の上部構造にも迫っている。戦後の農村は食糧難に対処しながら多くの余剰人口を吸収し、二三男・娘対策は農地拡大の開墾作業とやがて出稼ぎや集団就職に見る都市労働力へと流出吸収された。農地改革や供出割り当てと国家権力に振り回され、ついに米の減反政策に追い込まれる。やがて東京オリンピックを成功させ、資本主義経済の発展と労働運動の対極が深化する。

「土の記」は、大卒の離婚した娘母子が故郷を棄てて渡米し、生活は安心だからと米国人のペット獣医師と再婚する。あいさつに訪れた娘たちを集落こぞって迎え歓迎会を開いた。国際化時代で継ぐものの居なくなった家も人も、あの豪雨によって一気に押し流され壊滅へと追い込まれた。文学が描く世界は、非情な場面をえぐり取るが、鯰を飼いながら犬をお供に老いに立ち向かい稲作技術を改良し、だまされないように日常を懸命に生き、妻の死後、思い立って手ごろな自然石に自分の手で戒名を刻み込み、稲木で三本足を組み立てチェーンブロックで墓地に据え付ける執念は凄まじい。「独り暮らしの老人」時代の厳しさをリアルに活写する技を見せてもらった。

(柏)